

氏名	中妻 結
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人11号
学位授与年月日	2013（平成25）年9月26日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	Orality and Writing in Dickens and Neo-Victorian Fiction （ディケンズとネオ・ヴィクトリア小説におけるオラリティとライティング）
論文審査委員	主査 教授 原 英一 副査 教授 原田 範行 副査 教授 Kleitz, Dorsey 副査 青山学院大学文学部教授 富山 太佳夫

内容の要旨および審査の結果の要旨

I. 論文内容の要旨

本論文は、チャールズ・ディケンズ（1812-70）の小説と20世紀後半以降の現代イギリス・アメリカの作家による、いわゆるネオヴィクトリア小説を、ウォルター・オングのオラリティとリテラシーの概念を援用して、考察したものである。オングによれば、印刷テクノロジーの進歩とその結果としての活字印刷文化の大幅な拡大によって、19世紀は「声の文化」（オラリティ）が衰退し、書かれ印刷され読まれる「文字の文化」（リテラシー）が支配的になった。しかし、本論文の主張するところでは、印刷文化の大衆的拡大の主要な担い手であったディケンズの小説においても、オラリティが深く浸透しており、それはリテラシーの前提である書く行為（ライティング）そのものの身体性にも見ることができるとされる。一方、ヴィクトリア朝小説の書き換え、あるいは再創造を行う現代のネオヴィクトリア小説の作家たちは、その作品中でオラリティを前景化することにより、書くこと（ライティング）そのものを意識的に問い直し、

批判している。

本論文は、ディケンズとネオヴィクトリア小説の作家たちの作品をオラリティーとライティングという観点から詳細に分析することを通じて、なぜ現代においてネオヴィクトリア小説が盛んに創作され、一つのジャンルとして成立しているのか、なぜ書かれ読まれる文化、リテラシーの代表ともいえる小説という文学ジャンルがオラリティーと切り離し得ないのかを考察し、小説ジャンルそのものの本質解明にまで迫ろうと試みたものである。

II. 審査の結果の要旨

1. 論文の構成

本論文は4章構成である。各章の内容とそれについての評価は以下の通りである。

第一章はディケンズの小説について論じている。すでに先行研究で指摘されている通り、ディケンズの小説はもともと民謡、お伽話、ナーサリー・ライムなどの口承文化と強い親近性を持っている。彼の小説は月刊分冊による刊行あるいは週刊誌連載という形でリテラシーの大衆的拡大に沿ったものでありながら、こうした古い「声の文化」、オラリティーが支配的であった時代へのノスタルジアを内包している。ノスタルジアはディケンズの初期作品の中で、とくに *Master Humphrey's Clock* (1840-41) などに顕著に見られるのであるが、彼が小説家として活躍を始めた19世紀前半に書かれる文化、リテラシーが支配的文化となったことと関連していると考えられる。リテラシーの浸透は、*Oliver Twist* (1837-39) において、大衆的な犯罪実録パンフレット *The Newgate Calendar* が読まれる場面などに見ることができる。しかし、*Bleak House* (1852-53) においては、法律文書という形で顕在化されるリテラシーとテキストに浸透したナーサリー・ライムというオラリティーがせめぎ合う。さらに注目すべきは、ライティングが、ディケンズにおいては身体的行為であったことである。それは彼が自作の朗読会を継続して行うことにより、自らの作品を声によるパフォーマンスに変えたことに如実に示される。

本章は、オラリティーとライティングの対照性の観点からの議論によって、膨大な先行研究のあるディケンズ小説に新たな光をあてることに成功していると言える。

第二章は、ディケンズ作品から派生した2篇の現代小説を論じている。一つは、アメリカの作家フレデリック・ブッシュ Frederick Busch による *The Mutual Friend* (1978)、

もう一つはイギリスの作家スー・ローSue Roeによる *Estella: Her Expectations* (1982)である。ブッシュの小説のタイトルはディケンズの *Our Mutual Friend* に拠っているものだが、内容はディケンズの自作公開朗読ツアーのマネージャーを務め、後にディケンズについての回想録を書いたジョージ・ドルビーによる回想をフィクション化したものである。小説ではディケンズの家父長的権威とドルビーとの葛藤が、公開朗読というライティングとオラリティーが融合する場を通して描き出される。スー・ローの小説はディケンズの *Great Expectations* の登場人物エステラを 1980 年代の女性に置き換えて、ヒロインとしたものである。ディケンズのミス・ハヴィシャムに相当するダンサーの家に閉じこもるエステラの葛藤を通じて、小説のプロットというライティングの世界とそこからの解放が探求される。ディケンズの小説と現代の文学理論によって形成されるその解釈が、これらのネオヴィクトリア小説によって、文学作品として批判的に融合されることを明らかにしたことは非常に意義深い。

第三章では、いずれもディケンズの *Great Expectations* (1860-61)を背景テキストとする、ピーター・ケアリーPeter Careyの *Jack Maggs* (1997) とロイド・ジョーンズLloyd Jonesの *Mister Pip* (2007)という 2 篇のネオヴィクトリア小説が論じられる。ケアリーの小説は、ライティングについてのライティングとも言うべきものとなっている。ディケンズの小説でオーストラリアに流刑となった登場人物マグウィッチの物語をトバイアス・オーツなる作家が書く。ジョーンズの小説は現代のパプア・ニューギニアを舞台として、ディケンズの小説を「音読する」行為と現実の政治、文化の状況との関係がテーマとなっている。これら 2 篇は舞台がそれぞれオーストラリアとパプア・ニューギニアに設定されているために、ポストコロニアリズムで論じられることが多い。本論文では、ポストコロニアル批評を十分に咀嚼した上で、ディケンズの小説との関連をオラリティーとライティングという文脈において独創的に捉え直すことに成功している。

第四章では、ウェズリー・ステイス Wesley Stace の *Misfortune* (2005) とサラ・ウォーターズ Sarah Waters の *Fingersmith* (2002)が中心に論じられる。これらは、現代作家によるヴィクトリア朝を舞台とする作品である。いずれもジェンダーとセクシュアリティをテーマとしていて、ヴィクトリア朝におけるこれらの問題を現代的あるいはポストモダンの見方の適用によって探求している。ヴィクトリア朝のセクシュアリティについては、すでに膨大な先行研究が存在するが、本論文ではオラリティーとライティングという文脈での議論によって、これらの小説の意義を詳細に解明している。ウォーターズの小説

はレズビアニズムを主題とするように見られるが、その本質はテキストを盗むことの問題であり、大量の文書と同性愛という行為との矛盾である。ステイスの小説はジェンダーの曖昧性をめぐる物語の中に、バラードという口承文化が深く浸透し、それを最終的には支配する結果となる。現代のジェンダー批評をたくみに駆使しながら、ヴィクトリア朝小説とこれらの小説との関連性を深いレベルで分析したところに、本章の独創性が認められる。

2. 論文の特徴

本論文は、現代のイギリス・アメリカにおいてすでに一つの有力なサブ・ジャンルとして成立しているネオヴィクトリア小説、すなわちヴィクトリア朝小説の書き換え、再創造、あるいはヴィクトリア朝を舞台とする小説についての、先駆的な研究の一つであり、そのパースペクティヴの広がりと深さにおいては類例がほとんどない。ネオヴィクトリア小説については、個々の作品についての批評・論考はあるものの、まとまった研究は、本論文の引用文献リストに挙げられているように、まだわずかしかない。ディケンズの小説について、ネオヴィクトリア小説の議論からの照射によって、新たな側面を浮かび上がらせたことも、類例の少ない特徴といえる。特筆すべきは、オングのオラリティー／リテラシー論を基盤としていながら、さまざまな現代批評理論を広範囲に渉猟し、その成果を巧みに援用していることである。

3. 論文の評価

すでに述べたように、本論文はネオヴィクトリア小説についての先駆的な研究である。オングの理論に依拠しながら、具体的な作品論においては、作品そのものに内在するロジックから逸脱することなく、これまで明らかにされてこなかった、あるいは不十分にしか議論されてこなかった部分を解明している。ディケンズについてはすでに膨大な先行研究が存在するため、新たな知見を加えることは至難なのであるが、*Oliver Twist*、*Master Humphrey's Clock*、さらに *Bleak House* においてオラリティーが単なるノスタルジアを超えて、ライティングとせめぎ合う要素となっていることを指摘し得たことは、ディケンズ研究としても重要な成果である。過去 40 年間にイギリス・アメリカの英文学研究に多大の影響を与え続けた文学批評理論を大量に読みこなし、十分に消化した上で、自らの議論に援用したことも高く評価できる。これにより、ジェンダー・セク

シュアリティ論やポストコロニアル批評でしばしば見られる、理論をあてはめるだけの紋切り型の論に墮することなく、強固な論理を構築し得たのである。ネットのデータを含め、文字の文化が絶対的支配を確立しているかに見える現代においても、ディケンズにすでに存在したオラリティーとライティングの葛藤が作家を小説創作に駆り立てる動機として存在し続けていることを示したことは、小説というジャンルそのものの本質解明に迫るものであると言える。

以上により、本論文は課程博士の学位認定の水準に十分に達しているとみなされる。

4. 最終試験の概要

6月15日（土）午後2時から3時まで、公開形式で申請者による論文の概要・意義についての発表が行なわれ、審査委員および同席の教員、学生からの質疑応答がなされた。その後別室に移動し、午後3時より、審査委員（学外審査委員1名を含めて4名）により、論文の全体および細部について、詳細な質疑応答が行なわれた。その結果、審査委員全員の一致により、論文内容について合格と認定された。

外国語（フランス語）については6月18日（火）午後3時から4時に筆記試験が行なわれた。その結果、外国語についても十分な能力があると判断された。

以上を総合して、最終試験の判定を合格とした。